

# みんな笑顔で暮らしましょー

フリーランスライター・エディター たなかゆうこさん

## 創作工房 まいびん

「輝きのある仕事」の思いを込めて「あとらえる」と名付けたというたなかゆうこさんの事務所の机の上には、今年の春と夏に発行された、はつらつシニアの情報誌『あなたの笑顔、すてきです』の23号と24号がある。手にしてみると、はつらつとしたシニアの方々の、それぞれの活動の中で集合写真が表紙を飾っている。

笑い声が聞こえてきそうな写真。みんな笑顔で満ちあふれている。取材でカメラを持ったたなかさんへの「嬉しい、ありがとー」の気持ちが表示されているのだろう。

ほとんどの家庭にデジタルカメラがあり、誰もがいつでもレンズを向けられる昨今。だが、取材をされ、会話が文字になって表現され、その時の様子が冊子に掲載されるとなる…その喜びはひとしおだと思つ。

いきいきと輝いている自分の『今』が、たなかさんの手によって宝物として残るのだ。『私を（私達を）取材してくれてありがとう。いい記念になります』とおっしゃっていたたくと私も嬉しいですよ」と目を細めるたなかさんの笑顔がとても素敵だ。

年3回発行している情報誌『あなたの笑顔、すてきです』の編集・発行を一人で手がけて8年になる。取材に協力してくださった方々を数えると300人近くになるといふ。それだけではない。13年間広告代理店でラ

にした。知識も経験もなかったが、面白そうと応募。そして採用。その手がペンを持ち、原稿用紙のマスを埋めていくことに…。ライターに転身だ。

当時、ある有名なコピーライターが頭角を現し世間の注目を浴びていた。だが、山形ではコピーライターがコピーの機械と間違われるほどの差。なぜ編み棒を持つ手がペンを握るようになったのだろうか。

そこには赤い糸で結ばれた事実がある。小学3年生の時、作文に力を注いでくれた、大好きな先生との出会いだ。「本を読むのは好きだったけれど、作文は上手くはなかった。ある時、宿題で書いた作文をコンクールに出すというので、放課後、教室に残って先生が指導してくれた。先生を独り占めにできるその時間がとても嬉しかった」と笑顔で話しながら、「それから書くことが好きになったのかな」と結ぶ。

ライターとしての才能はこうして培われたのかも…。東京で勤めていた頃、何の目的も無いまま、ただ素敵だなと思った情報誌やパンフレットを集めていたというのも、見えないところで現在の仕事に繋がっていた糸を感じる。

電車の中で聞いた子ども達の何気ない言葉を心に留めて、手帳に書き記していたことも、今のたなかさんを大きくしているのだろう。

## はつらつシニアの笑顔

独立して数々の仕事をこなしていた頃に、介護保険制度がスタートする。

介護や福祉に関する取材が増え、制度や専門用語を理解しないと原稿を書くのが難しい。そこで、基礎的な知識を学べ、介護の実務経験が無くても受験できる福祉住環境コーディネーターを知り資格をとる。

## たなかゆうこ

INTERVIEW PERSON



### PROFILE

アパレルメーカーのデザイナー、広告代理店でのコピーライターを経て、1997年フリーランスライター・エディターとして独立。多忙な業務の傍ら、はつらつシニアの情報誌『あなたの笑顔、すてきです』の編集・発行を一人で務める。山形市出身、52歳。

母方の祖父が大工だったこともあり、住宅を見て歩くことが好きだったことも後押ししたのかも…。

そして介護に関する取材を重ねていくうち、ふとあることに気が付く。

「介護も大切なこと。世間では介護に関する必要としない元気な高齢の方も多い。そうした方々をもっと紹介してもいいのでは…」それが、シニア向け情報誌『あなたの笑顔、すてきです』を発行するきっかけになった。誌面に登場した方が、出来上がった情報誌を手にして喜びの声を寄せる。遠くに住んでいる子どもや孫にも掲載誌を送った。家族からは、今までにない一面を見ることができて驚いていると。

な喜びぶりだ。

自分の存在を改めて知るといふ喜びは、元気な人にとって新たな活力剤となり、ますます元気はつらつにさせてくれるのであろう。「嬉しい」といふ言葉を聴けるのが嬉しい」とたなかさん。

## 人生の記録のお手伝い

【将棋の駒はね、数え年の10歳の時から。大正15年の6月12日生まれだから、昭和10年から将棋駒の文字書きをやった。将棋の駒というのは大きく分けて3種類なんだけれども、私は駒木地に直接、漆で文字を書く書き駒の職人だ。本名は恵治。雅号は「天恵」というのよ。私の話する前に、親のこと聞いてもらわねえな。親のことだけでも、やっぱり時間かかるんだ。】  
『この人生、天の恵みよ』語り 森天恵 聞き書き たなかゆうこより



語り手の話し言葉で書かれた文章が、どこか懐かしい感じがする。たなかさんが今取り組んでいる『聞き書き』という文章のスタイル。目の前に話し手を感じ、手の動きも伝わってくるような、読んでいて「音」を感じる不思議な冊子。

「聞かせてください、あなたの人生」自分史づくりや自費出版のサポートもいる、その一つとして、聞き書きや追悼誌も手がけている。

## 私は黒子

記事を通して、いきいきと輝いている方の

ライター、プランナーとして会社案内、記念誌、情報誌などの企画、コピー制作、原稿執筆なども手がけ13年前に独立。現在に至っている。

## 意外な出発点

家がメリヤス工場を営んでいたこともあり、ファッションに関心があった。高校時代は、ニットが好きでよく自分のセーターを編んでいた。高校を卒業して東京のデザイン学校に通い、大手アパレルメーカーに入社。新入社員が百人も採用された時代。希望に満ちて入社したもの、配属されたのは40代のミセスを対象としたブランド。海外のファッション雑誌を見てデザインをアレンジし、売れるものを作ろうと励むものの、まだ20歳になったばかりの自分の感覚とは大きなギャップがあった。それに1点ずつのモノづくりではなく、大量生産にも馴染めなかった。ニットは好きだけれど、なにか違う。

自分がやりたいことは…？答えの出ないまま、数年後に退職。山形に戻る。

## なぜかライターに

しばらくオーダーメイドのニットを編んだりアルバイトをしているうち、何気なく地元広告代理店のコピーライター募集を目

姿を紹介したい。私は「黒子」。その記事を読んで貰える事が、何よりの励みになる。

今まで、仕事を辛いと思ったことは無い。

どんな仕事も大変なのは同じ、前向きな姿勢。女性の力強さが伝わってきて嬉しい。

## 男性も女性も その人らしく

「長い間多くの人と係わってきて感じたことの一つは、女性の方は元気があるということ。女性は初めて会った人同士でも世間話が出るが、男性はなかなか出来ない人が多い。趣味を持ち、仲間と共にコミュニケーションがとれる場を持つことが輝く秘訣では？」

男性も女性も、いくつになってもその人らしく、それぞれに輝いて生きられるのが一番だと思います。

そして、結んだ言葉が

「みんな笑顔で暮らしましょー！」



嬉しくて枕元に置いて寝た。真夜中に目が覚め、また読み返して、から寝たと、感動の数々が寄せられたという。

自分のことが取り上げられた記事や写真に見入る元気な方々の声が聞こえてきそう



編集協力員 今野 久子